

愛着スタイルがインターネット・トラブルに及ぼす影響

宮本 邦雄

問題と目的

Bowlby(1969)の愛着理論が、幼児期から児童期、青年期、成人期へと拡大されることによって、生涯にわたる対人関係の個人差が、愛着の内的作業モデル(IWM: Internal Working Models)という対人関係の鋳型モデルに由来すると考えられるようになった。IWMは「自分は愛着対象から愛される価値のある存在か」という自己モデルと「愛着対象は自分を保護してくれるか」という他者モデルとからなり、乳幼児期に行なわれた愛着対象との相互作用をとおして一般化・抽象化された自己と他者への期待や信念を含んでいる。

乳幼児期における愛着の個人差(安定型、回避型、アンビバレント型)に対応する形で成人の愛着スタイルの個人差も親密な対人関係の研究の中に取り入れられてきた(Hazan & Shaver,1987)。しかし近年、親密な関係に対する快適さの次元(親密性の回避、関係回避)と親密な関係に対する不安の次元(見捨てられ不安、関係不安)の2次元モデルによりとらえる立場が受け入れられている(Brennan, Clark, & Shaver,1998)。さらに、両次元を自己と他者(愛着対象)のポジティブなIWMとネガティブなIWMに対応させ、両者の組み合わせから成人の愛着スタイルを分類する4カテゴリー・モデルが提唱された(Bartholomew & Horowitz,1991)。すなわち、自分は他者から愛情を受ける価値がある/愛着対象は信頼できるし関心をもってくれるというポジティブなIWMと自分には価値がない/他者も信頼できないし拒否的であるというネガティブなIWMの組み合わせによって、愛着スタイルを、両者ともポジティブな安定型、自己モデルがポジティブで他者モデルがネガティブな拒絶回避型、自己モデルがネガティブで他者モデルがポジティブなとらわれ型、両者がネガティブな対人恐怖的回避型(恐怖回避型)に4分類する方法である。

安定型は、他者への信頼感や自尊心が高く、対人関係を調整することができ、他者との相互作用の中で感情を表出する。拒絶回避型は、他者に対して拒否的敵対的であり、他者に依存することが少なく、感情を抑制する傾向がある。とらわれ型は、他者に対する不信感、他者か

らの分離不安がみられ、いつも他者の気持ちを知りたいと思う。恐怖回避型は、他者の気持ちを信じることができないし、自分にも自信がない。他者に拒絶される恐れから孤立する傾向がある(安藤・遠藤,2005)。

こうした愛着スタイルの違いは、親密な対人関係においても敵対的な対人関係においても、その相互作用や関係性の持ち方に大きな役割を果たすことが見出されてきた。成人愛着面接(AAI; Adult Attachment Interview, George, Kaplan, & Main,1986)を用いたいくつかの研究によると、安定型は友人との良好な関係を持つこと、とらわれ型は他者に対して信頼や期待をもつことができにくいため、さまざまな対人関係の問題を持ちやすいこと(Dodge,1993)、回避型は友人と持続的で安定した関係を持つことが難しいことが指摘されている(Gavin & Furman,1996; 金政,2007他)。また、対人関係の葛藤解決方略と愛着スタイルの関連についても、Greasy(2002)や加納(2010)により、親密性の回避と見捨てられ不安がネガティブな葛藤解決方略と関連することが示唆された。

近年、携帯電話の機能が拡大し、インターネットはいつでもどこでも誰でも使える、コミュニケーション、情報収集、娯楽のツールとして用いられるようになった。内閣府(2013)が青少年を対象に行ったインターネット利用の実態調査によると、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)の利用は学年が上がるにつれ活発化し、高校生になると36%の者がSNSを利用している。ミクシーやフェイスブック、ラインなどのSNSは、友人や知人とのコミュニケーションを格段に効率よく行うことができ、親密性を高める一方で、その「閉鎖的活動」という特徴によっていわゆる「SNS疲れ」という問題が発生してきている(加藤,2013)。こうした状況の中で、インターネット利用によってコミュニケーションの形態も大きく変化し、利用の仕方には個人差も大きいと考えられる。

微妙な関係を調整・維持していくことに苦手意識をもつ者は、非言語的なコミュニケーションを介さずに適切な対人距離を保ちつつ情報交換が可能なインターネットの利用によって対人関係を充足していると考えられる。また、ある程度のソーシャルスキルを有する者は、イン

ターネットを利用することで更に対人関係のネットワークを拡充していくとも考えられる。

インターネット利用に伴うトラブル（以下ネットトラブル）も身近なものとなっており、文部科学省「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」（2009）によると、高校生では「チェーンメールを送られた」（57.1%）、「迷惑メールを送られた」（32.7%）など、トラブルの体験者が増加している。また特に、児童期や青年前期の子どもの社会性の発達や適応に及ぼす対人的トラブルの影響も懸念されている（原,2011；原・浅田,2012；原田,2013）。内海(2010)は、中学生を対象に、インターネットを介したいじめ（以下ネットいじめ）の加害経験・被害経験と親の統制とネット行動の関連を調査した。その結果、いじめ非経験者は67%、いじめ経験のみ8%、いじめられ経験のみ7%、両方経験は18%であった。また、両方経験者は、非経験者に比べて、携帯電話によるインターネット使用時間が長く、表出性攻撃だけでなく関係性攻撃も有意に高かった。

宮本(2014)は、青年期において愛着スタイルが友人関係のもち方に影響し、それがインターネット利用の多様性にどのように影響するかを検討した。その結果、愛着スタイルの「親密性の回避」は友人との相互作用とともにインターネットを介した交流も不活性化することがわかった。一方、「見捨てられ不安」は友人から傷つけられることを回避する傾向を強め、交流、娯楽、情報といったインターネットの利用を動機づける。しかし実際の利用は顕在化しないという複雑な関連が示唆された。

本研究の目的は、青年期において愛着スタイルがネットトラブルとその対処に及ぼす影響を調査し、以下の仮説を検討することである。愛着スタイルの関係回避（親密性の回避）傾向が強いと、対人関係が希薄でインターネットを利用したコミュニケーションも抑制的であり、ネットトラブルも少なく、その対処も回避的なものとなるであろう（仮説1）。一方、関係不安（見捨てられ不安）傾向が強いと、親密な対人関係を求めるがネットトラブルは多く、その対処としては他者に対して積極的なサポートを求める傾向が強いと考えられる（仮説2）。また、安定型、とらわれ型、回避型、恐れ型というタイプ別で見ると、ネットトラブルは、とらわれ型が最も多く、他の3タイプは差が見られないであろう（仮説3）。対処行動については、とらわれ型は他者への相談など積極的な対処が多く、回避型、恐れ型は少ないであろう（仮説4）。

なお、ネットトラブルの調査項目には、いわゆるネットいじめの項目が含まれており、現在の状態を回答することは心理的な負荷が大きい場合も考えられる。今回の

調査対象が大学生であることから、ネットトラブルについては高校生時代を回想して回答を求めることとした。

方法

調査対象：東海地方の私立大学生と短期大学生 246 名（男性 68 名、女性 193 名）、平均年齢 19.5 歳 ($SD=1.30$) が調査対象となった。

質問紙の構成

- 1) フェイス・シート、年齢、性別、学年、大学・短期大学、居住（自宅か独居か）を尋ねた。
- 2) 愛着スタイル尺度（ECR・GO, 中尾・加藤, 2004）、関係回避 12 項目、関係不安尺度 12 項目の計 24 項目の短縮版を用い、「全く当てはまらない(1点)」、「当てはまらない(2点)」、「やや当てはまらない(3点)」、「どちらでもない(4点)」、「やや当てはまる(5点)」、「当てはまる(6点)」、「非常によく当てはまる(7点)」の 7 段階評定で回答を求めた。
- 3) ネットトラブル質問項目、予備調査及び文部科学省(2012)、原田(2013)等を参考に作成した高校生時代に体験したインターネット上でのトラブル 21 項目について、「なかった(1点)」、「1, 2 度あった(2点)」、「何度かあった(3点)」、「よくあった(4点)」の 4 段階評定で回答を求めた。
- 4) ネットトラブル対処質問項目、当時のネットトラブルにどのように対処したかについての 5 項目、「親しい友人に相談した」、「ネットトラブル専門のサービスや相談機関に相談した」、「家族に相談した」、「ネット上で相談した」、「先生に相談した」、さらに「何もしなかった」(非対処) 1 項目に、「あてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらでもない(3点)」、「ややあてはまる(4点)」、「あてはまる(5点)」の 5 段階評定で回答を求めた。

調査の実施：2014 年 10 月に講義を利用して実施した。質問紙に個人情報の保護、調査の参加・不参加は自由意志によることを明示し、口頭でも説明した。

結果

1. ネットトラブル尺度の因子分析

ネットトラブルについては、主因子法・プロマックス回転で因子分析を行い、いずれの因子にも負荷量の低い項目、複数の因子に負荷量の高い項目を除き、スクリープロットの減衰状況から、表 1 に示すように 6 因子を抽出した（累積寄与率 45.7%）。

表1 インターネット・トラブル質問項目の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）

因子項目	I	II	III	IV	V	VI
I. いじめ被害因子 ($\alpha=0.734$)						
1. 自分についてのうわさやうそを、ブログや掲示板などに書き込まれた	.743	.024	-.042	-.030	-.010	-.012
16. 自分の個人情報をブログや掲示板などに書き込まれた	.649	.006	-.023	.189	-.041	-.040
20. 悪口やいやがらせのメールを送られたり、書き込みをされた	.507	-.040	.043	-.190	.377	-.036
2. ラインやツイッターでのやりとりで対人関係が悪化した	.410	-.017	.141	.098	.043	.011
13. ラインの既読システムで友だちとの関係が悪化した	.358	.013	.083	.102	.021	.033
II. ネット依存因子 ($\alpha=0.752$)						
4. インターネット・ゲームが止められなくなった	.102	.763	-.101	.130	-.219	-.018
21. インターネットにのめり込んで勉強に集中できなかったり、睡眠不足になった	-.025	.736	.046	-.046	.020	-.023
10. 動画サイトをチェックするのを止められなくなった	-.130	.567	.050	.003	.142	.013
19. ツイッターやフェイスブックを止められなくなった	.080	.561	.035	-.146	.140	.049
III. 匿名情報因子 ($\alpha=0.751$)						
17. メールやラインで知らない人からメッセージが届いた	-.129	.051	.918	.123	-.016	-.049
18. ラインで知らないうちに友達にされた	.096	-.046	.726	-.077	-.063	.012
12. チェーンメールが送られてきた	.163	.024	.502	-.098	.001	.085
IV. いじめ加害因子 ($\alpha=0.65$)						
5. ラインの乗っ取りにあった	.191	-.078	.014	.594	-.104	.035
8. 他人についてのうわさやうそを、ブログや掲示板などに書き込んだ	-.035	-.003	.026	.555	.352	-.034
7. 他人の個人情報をブログや掲示板などに書き込んだ	-.019	.043	-.055	.440	.119	.039
V. 対人トラブル因子 ($\alpha=0.79$)						
14. 悪口やいやがらせのメールを送ったり、書き込みをした	.005	.022	.001	.097	.798	-.056
11. 個人的なメールやチャットなどの文章を、勝手に転送された	.092	.023	-.109	.131	.606	.082
VI. 架空請求因子 ($\alpha=0.618$)						
9. インターネット・ゲームで知らないうちにお金を請求された	-.024	-.022	.010	.004	.027	.759
3. 通販サイトから架空請求がきた	-.012	.030	.013	.051	-.044	.611
因子間相関	I	.239	.262	.402	.526	.262
	II		.320	.057	.195	.272
	III			.096	.332	.217
	IV				.372	.227
	V					.206

第1因子は、「うわさやうそを、ブログや掲示板などに書き込まれた」、「悪口やいやがらせのメールを送られたり、書き込みをされた」という項目に負荷が高く「いじめ被害」因子と命名した。第2因子は、「インターネット・ゲームが止められなくなった」、「インターネットにのめり込み、勉強に集中できなかつたり、睡眠不足になった」という項目に負荷が高く「ネット依存」と命名した。第3因子は、「悪口やいやがらせのメールを送ったり、書き込みをした」、「ラインで知らないうちに友達にされた」などの項目に負荷が高く、匿名性に由来するトラブルと解釈し、「匿名情報」因子と命名した。第4因子は、「他人についてのうわさやうそを、ブログや掲示板などに書き込んだ」、「他人の個人情報をブログや掲示板などに書き込んだ」に負荷が高く「いじめ加害」因子とした。第5因子は、「悪口やいやがらせのメールを送ったり、書き込みをした」、「個人的なメールやチャットなどの文章を、勝手に転送された」の負荷が高かったので「対人トラブル」因子とした。最後の第6因子は、「インターネット・ゲームで知らないうちにお金を請求された」という項目で「架空請求」因子とした。

信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、「いじめ被害」($\alpha = .734$)、「ネット依存」($\alpha = .752$)、「匿名情報」($\alpha = .751$)、「いじめ加害」($\alpha = .650$)、「対人トラブル」($\alpha = .790$)、「架空請求」($\alpha = .618$)と、ある程度の信頼性が認められた。

さらに、ネットトラブル対処項目については1因子構造が確認されたので合計得点を算出して「積極的対処」得点とした($\alpha = .759$)。

2. 各尺度の記述統計と相関係数

愛着スタイル尺度の下位尺度「関係不安」と「関係回避」については、それぞれの合計得点を算出し尺度得点とした。ネットトラブルの6因子、ネットトラブル対処の「積極的対処」についても合計得点を算出し、「非対処」についてはそのままの得点を以下の分析に用いた。

各尺度の記述統計を表2に示す。性差は、「対人トラブル」(男性>女性、 $t=2.170, df=257, p<.05$)に見られたのみであったため、以降の分析は男女を区別せずに行った。

さらに各尺度間の相関を算出したところ(表3)、愛着スタイルの「関係不安」とネットトラブル尺度の「いじめ被害」、「ネット依存」、「対人トラブル」に正の相関が認められた。また「積極的対処」にも低い正の相関がみられた。ネットトラブルと対処の相関については、「いじめ被害」、「いじめ加害」、「対人トラブル」、「架空請求」と「積極的対処」、「ネット依存」、「対人トラブル」と「非対処」に、いずれも低い正の相関が認められた。

ネットトラブル尺度の下位尺度間の相関をみると、「いじめ被害」、「いじめ加害」、「対人トラブル」に中程度の正の相関が見られ、他の因子間にも低い正の相関が認められた。

3. 愛着スタイルのネットトラブルへ及ぼす影響

愛着スタイルのネットトラブルと対処に及ぼす影響を検討するため、愛着スタイルの「見捨てられ不安」と「親密性の回避」を説明変数、ネットトラブルの各下位尺度、「積極的対処」と「非対処」を基準変数として重回帰分析

表2 各尺度の男女別記述統計とt検定

	男性 (N=63~67)		女性 (N=188~193)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
関係不安	44.67	13.703	44.54	12.747	ns
関係回避	48.98	11.647	46.21	9.196	ns
いじめ被害	6.15	2.179	5.99	1.765	ns
ネット依存	6.38	2.810	6.52	3.091	ns
匿名情報	6.09	2.586	6.46	2.396	ns
いじめ加害	3.48	1.397	3.23	.692	ns
対人トラブル	2.34	1.213	2.12	.447	2.170 *
架空請求	2.46	.959	2.32	.803	ns
積極的対処	8.57	4.252	9.50	4.308	ns
非対処	2.50	1.631	2.37	1.543	ns

表3 各尺度間の相関係数 (N=246~262)

	愛着スタイル		ネット・トラブル				対処		
	関係不安	関係回避	いじめ被害	ネット依存	匿名情報	いじめ加害	対人トラブル	架空請求	積極的対処
関係不安									
関係回避	.046								
いじめ被害	.328**	.045							
ネット依存	.198**	.032	.202**						
匿名情報	.066	-.018	.273**	.291**					
いじめ加害	.097	-.005	.389**	.094	.118				
対人トラブル	.290**	.085	.515**	.188**	.185**	.506**			
架空請求	.158*	.054	.174**	.219**	.189**	.268**	.199**		
積極的対処	.188**	-.153*	.141*	.098	-.013	.168**	.135*	.136*	
非対処	-.016	.106	.089	.211**	.097	.045	.160*	.029	-.059

** . P<.01 * . P<.05

表4 愛着スタイルを独立変数、ネット・トラブルを従属変数とした重回帰分析

	いじめ被害	ネット依存	匿名情報	いじめ加害	対人トラブル	架空請求	積極的対処	非対処
関係不安	0.331 **	0.200 **	.079	.101	0.288 **	0.161 *	0.195 **	-.021
関係回避	.032	.023	-.023	-.010	.074	.047	-.160	.107
R2 乗	.112	.041	.007	.010	.090	.029	.061	.012

** . P<.01 * . P<.05

を行った。その結果、「関係不安」が「いじめ被害」($\beta = .331$)、「ネット依存」($\beta = .200$)、「対人トラブル」($\beta = .288$)、「架空請求」($\beta = .161$)に対していずれも促進的な影響を及ぼすことが認められた。さらに、「関係不安」は「積極的対処」に正の影響がみられた。一方、「関係回避」はどのネットトラブル、対処にも関連は認められなかった。

3. 愛着スタイルとネットトラブルの関連

愛着スタイルとネットトラブルの関連を、愛着スタイルを独立変数とした分散分析によって確認するために、「関係回避」高低群と「関係不安」高低群の組み合わせにより、安定型、とらわれ型、回避型、恐れ型を構成した。回避型が5名と少なかったため、ネットトラブル各尺度と対処の2得点について、安定型、とらわれ型、恐れ型の3群を独立変数とする1要因分散分析を行った。多重比較はLSD法を用いた。

その結果表5に示すように、まず「いじめ被害」($F = 6.536, df = 2/234, p < .01$)が有意であり、安定型よりもとらわれ型と恐れ型の得点が高いことが認められた。

また「ネット依存」($F = 3.115, df = 2/237, p < .05$)が有意であり、恐れ型は安定型ととらわれ型よりも高いレベルを示した。さらに「対人トラブル」については($F = 8.833, df = 2/236, p < .01$)、恐れ型が最も高い得点を示し、次にとらわれ型が高く、安定型は最も低かった。「架空請求」も有意であり($F = 3.039, df = 2/237, p < .05$)、恐れ型が安定型、とらわれ型よりも高い得点を示した。

考察

本研究の目的は、愛着スタイルがインターネット利用の際に生じる様々なトラブルとその対処に及ぼす影響を検討することであった。

ネットトラブルに関する質問項目について因子分析を行なった結果、自分のうわさやうそをネット上に書き込まれる「いじめ被害」、インターネット利用がやめられなくなる「ネット依存」、知らない人からメールが届いたり友達にされたりする「匿名情報」、他人への中傷や個人情報をネット上に書き込む「いじめ加害」、悪口の

表5 ネット・トラブル下位尺度、対処行動の愛着スタイル別の記述統計と分散分析結果

	安定型(N=69)		とらわれ型(N=98)		恐れ型(N=70)		分散分析	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	F 値	多重比較
いじめ被害	5.46	.948	6.07	1.725	6.56	2.399	6.536 **	安定型<とらわれ型、恐れ型
ネット依存	5.80	2.483	6.71	3.014	7.01	3.478	3.115 *	安定型、とらわれ型<恐れ型
匿名情報	6.07	2.385	6.60	2.403	6.56	2.466	1.085	
いじめ加害	3.26	.585	3.20	.728	3.49	1.384	1.989	
対人トラブル	2.01	.121	2.13	.444	2.35	1.050	4.833 **	安定型<とらわれ型<恐れ型
架空請求	2.23	.645	2.27	.652	2.53	1.048	3.039 *	安定型、とらわれ型<恐れ型
積極的対処	9.35	4.079	8.95	4.052	9.64	4.822	.550	
非対処	2.19	1.458	2.55	1.586	2.40	1.624	1.062	

**、P<.01 *、P<.05

メールを送ったり、個人的なメールを転送されたりする「対人トラブル」、ネット利用によって架空請求を受ける「架空請求」の6因子が抽出された。

ネットトラブルの因子間相関より、「いじめ被害」、「いじめ加害」、「匿名情報」、「対人トラブル」は対人関係のトラブルとしてまとめることができ、「ネット依存」と「架空請求」は個人的なネット利用のトラブルのカテゴリーに入ると考えられる。とらわれ型と恐れ型は、ネガティブな自己観が共通しており、「いじめ被害」としての脆弱性要因となっていると考えられる。一方、「ネット依存」は恐れ型が高いことから、ネガティブな自己観と他者との関係からの退避傾向によってインターネットへの耽溺が生じている可能性を示唆する。おそらく、「架空請求」が多いことも、インターネット利用の頻度の高さに関連していると推察される。

また、「いじめ被害」と「いじめ加害」には中程度の正の相関がみられた。香取(1999)は、大学生・短期大学生を対象に調査を行い、いじめの役割の中で被害者かつ加害者が最も多いことを報告しているが、他の先行研究と同様に(内海,2010;山崎・原,2010)、この結果は、ネットいじめにおいても被害者と加害者が容易に交替する傾向にあることを示唆している。

さらに、愛着スタイルを独立変数としネットトラブルと対処を従属変数とした重回帰分析から、「関係回避」はどのネットトラブルにおいても影響がみられず、また対処にも関連が認められなかった。すなわち「関係回避」は、ネットトラブルを抑制し、対処も回避的であろうという仮説1は支持されなかった。

一方、「関係不安」についてはネットトラブルの「いじめ被害」、「ネット依存」、「対人トラブル」、「架空請求」に対していずれも正の影響が認められた。この結果は、

仮説2を支持するものであり、他者に対する信頼感の低さ、自尊心の低さに由来する対人関係の不安定さによって、インターネットを介したいじめなどの対人トラブルに引き込まれやすいことが示された。また、インターネットを利用したゲームなどに過剰に耽溺する依存傾向や経済的なトラブルも生じやすいことが示唆された。

さらに、「関係不安」は「積極的対処」に促進的な影響を及ぼすことがわかった。すなわち、トラブルが生じた場合には、家族や教師、友人などに解決を相談する傾向が認められた。以上より、仮説2は支持されたといえる。ネットいじめにおいては、積極的な相談行動が抑制される傾向が報告されている。例えば、深谷・高旗(2008)によると、BBSで攻撃を受けた場合でも47.2%が誰にも相談しなかったという回答であった。藤・吉田(2014)は、ネットいじめの被害者において周囲への相談行動が抑制される過程を検討し、被害時の脅威認知が無力感を経て相談行動を抑制することを示した。本研究の結果は、関係不安傾向が高いことによって、こうした被害時の脅威認知の低減が生じやすいことを示唆している。

愛着スタイルの各タイプにおいて、ネットトラブルと対処で平均得点の間に差が見られるか検討したところ、「いじめ被害」についてとらわれ型と恐れ型の得点が安定型よりも高いことが認められた。また、「対人トラブル」については、恐れ型が最も高い得点を示し、とらわれ型、安定型と続いた。さらに、「ネット依存」と「架空請求」においては、恐れ型が安定型ととらわれ型よりも高い得点を示すことが認められた。また、回避型においては特にネットトラブルと対処で他のタイプと異なる特徴が見られなかった。以上の結果は仮説3を支持するものであるが、対処行動については有意な群間差がみとめられず、仮説4については支持されなかった。

以上より、愛着スタイルの「関係不安」は、友人関係の中で不安定な状態を恐れ、それにとらわれる心性によって、インターネット上でも対人的なトラブルを経験したり、インターネットの過剰な利用や耽溺したりする傾向を示し、さらに経済的なトラブルにもかかわりやすい傾向にあることがわかった。

最後に本研究の問題と今後の課題について言及したい。まず、今回の調査対象者は大学生であった。文部科学省がおこなった平成20年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、ネットを介したいじめの認知件数は、小学校457件、中学校2,765件、高等学校1,271件、特別支援学校34件となっている。本研究で行なったネットトラブルの調査はいじめに特化したものではないが、愛着スタイルといじめ体験の関連に焦点を当てるとすれば、中学生時代の体験を対象とすることが必要と思われる。

第二に、いじめ体験とその自己開示が愛着スタイルに及ぼす影響を検討した三宅(2004)によると、いじめられ体験をもつ者は安定次元得点が低く、アンビバレント次元得点が高い傾向にあるが、女子では自己開示によってその影響を軽減されることを報告している。すなわち、いじめの被害体験が愛着スタイルに影響するという視点であり、愛着スタイルの変容要因としてのいじめ体験へのアプローチも必要と思われる。

第三に、ネットいじめと実生活でのいじめの関連をあげることができる。森田・清水(1986)は、学校内でのいじめの4層構造説を提唱し、いじめの場が被害者と加害者だけで構成されているのではなく、観衆と傍観者が存在して成り立っていることを示した。ネットいじめと実生活でのいじめがどのような対応関係にあるのかという問題とともに、いじめの4層構造がネットいじめにおいても適用できるのか検討する必要があるだろう。

以上、ネットいじめに関わる課題を列挙したが、ネット依存や経済的なトラブルについても、愛着スタイルの影響及び媒介要因についてさらに詳細な検討が必要と思われる。

要約

大学生を対象とした質問紙調査によって、愛着スタイルがインターネットの利用に伴うトラブルとその対処に及ぼす影響を検討した。その結果、愛着スタイルの関係不安傾向は、友人関係の中で不安定な状態を恐れ、それにとらわれる心性によって、インターネット上でも対人的なトラブルを経験したり、インターネットの過剰な利

用や耽溺したりする傾向を示し、さらに経済的なトラブルにもかかわりやすい傾向にあることがわかった。また、関係不安傾向は積極的な対処行動を促進することも認められた。

引用文献

- 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 2005 インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響 パーソナリティ研究, **14**, 69-79.
- 安藤智子・遠藤利彦 2005 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦(編) アタッチメント生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- Bowlby, J. (1969/1982) *Attachment and Loss: vol.1 Attachment*. New York: Basic Books.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. 1998 Self report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press.
- Dodge, K.A. 1993 Social-cognitive mechanisms in the development of conduct disorder and depression. *Annual Review of Psychology*, **44**, 559-584.
- 深谷和子・高旗正人 2008 日本子ども社会学会平成19年度調査「生徒のケータイとネット利用、『学校裏サイト』に関する調査報告書」より抜粋—生徒調査を中心に 児童心理, **62**, 148-157.
- 藤 桂・吉田富二雄 2014 ネットいじめ被害者における相談行動の抑制 教育心理学研究, **62**, 50-63.
- Garvin, L.A., & Furman, W. 1996 Adolescent girls' relationships with mothers and best friends. *Personal Relationships*, **3**, 117-136.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1986 *Adult Attachment Interview Protocol* (3rd ed.). Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
- Greasy, G. 2002 Associations between working models of attachment and conflict management behavior in romantic couples. *Journal of Counseling Psychology*, **49**, 365-375.
- 原田恵理子 2013 高校生におけるネットいじめの実態 東京情報大学研究論集, **17**, 9-18.
- 原 清治 2011 ネットいじめの実態とその要因 (I) —学力移動に注目して— 佛教大学教育学部論集, **22**, 133-152.
- 原 清治・浅田 瞳 2012 ネットいじめの実態とその要因 (II) 佛教大学教育学部学会紀要, **11**, 13-20.
- Hazan, C., & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 金政祐司 2007 青年期の愛着スタイルと友人関係におけ適応性との関連 社会心理学研究, **22**, 274-284.
- 加納諭嘉子 2011 愛着スタイルと脱中心化が葛藤方略と心理的適応に及ぼす影響 平成23年度東海学院大学大学院修士論文
- 香取早苗 1999 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, **32**, 1-13.

- 加藤千枝 2013 「SNS疲れ」に繋がるネガティブ経験の実態－高校生25名への面接結果に基づいて 社会情報学, 2, 31-43.
- 内閣府 2013 青少年のインターネット利用環境実態調査
- 三宅邦建 2004 いじめの被害経験と、その自己開示と成人期の愛着との関連 九州保健福祉大学研究紀要, 5, 1-10.
- 宮本邦雄 2014 青年の愛着スタイルが友人関係とインターネット利用に及ぼす影響 東海学院大学紀要, 7, 185-192.
- 文部科学省 2009 子どもの携帯電話等の利用に関する調査
- 森田洋司・清水憲二 1986 いじめ：教室の病い 東京：金子書房
- 豊田雄彦・竹内美香・市川博・田代光輝 2014 インターネット利用リスクを減少させる教育プログラム調査－技術・家庭科、情報科、大学情報リテラシー科目に関する調査－自由が丘産能短期大学紀要, 47, 1-12.
- 内海しよか 2010 中学生のネットいじめ、いじめられ体験－親の統制に対する子どもの認知、および関係性攻撃との関連－, 教育心理学研究, 58, 12-22.
- 山崎 瞳・原 清治 2010 ネットいじめを規定する要因の実証的研究 (I) 佛教大学教育学部学会紀要, 9, 55-172.